

平成22年 5月28日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720094

研究課題名（和文）ロシア語名詞アクセントの動態と借用語の影響に関する研究

研究課題名（英文） A study on movement of Russian nominal accent and influence of loanwords

研究代表者

安藤 智子 (ANDO TOMOKO)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：00345547

研究成果の概要（和文）：

現代ロシア語のアクセントの位置がどのような条件によって決まっているかを、歴史的な研究の背景をもとに、現代のロシア語に内在的な変化と借用語の影響という観点から分析した。その結果、現在では多くの語が語幹末尾の音節にアクセントを持つことと、それ以外のアクセント位置の多くが借用語の原語のアクセント・語末要素によるアクセント位置の類推・語構成などの要因によって説明できることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The analysis of accentuation in modern Russian in the light of internal changes and influence of loanwords with a background of diachronic studies revealed that Russian nouns have the default accent on the final syllable of the stem and that most cases of deviations from the default are caused by preservation of original accents of loanwords and analogy with word-final elements or morphological structures.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	360,000	2,260,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：音韻論・ロシア語・アクセント・借用語・通時的変化

1. 研究開始当初の背景

ロシア語のアクセントはこれまでよく研究されているが、その多くは通時的な考察を中

心とするものであった。現代語に関しても、ゆれや変化の方向性に関して総合的な分析は不十分である。

これまでの報告者自身の研究では、ロシア語における名詞アクセントの変化の方向性について、最適性理論 (Prince, Alan & Paul Smolensky (1993) “Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar,” Technical Report #2 of the Rutgers Center for Cognitive Science, Rutgers University.) の枠組みで仮定される制約階層の変化を理論上は整理することができた。しかし、その基盤となる言語資料は不足しており、未だ現在の変化の方向性を厳密に示しているとは言い難い。

ロシア語の名詞のストレス位置には、これまでの研究から、a) 固有語におけるスラヴ語の音調の残滓、b) 借用語における原語のアクセント、c) 類似の語末要素からの類推、d) 各数のパラダイムにおけるストレス位置の水平化と数の区別による対照、という4要素がかかわっている可能性が考えられる。このうち、a) とd) についてはある程度整理されているが、b) とc) については近年の借用語の増大に伴って、より新しいデータに基づく分析が必要である。

借用語のアクセントに関する研究は、日本語や英語について興味深い研究がなされており、理論的にも整理されてきている。一方、ロシア語における借用語については、Supersanskaja, A. V. (1968) *Udarenie v zaimstvovannyx slovax v sovremennom russkom jazyke*, Moscow: Nauka などの研究があるが、その後の社会の変化に伴って借用語が急激に増大した結果を反映する時期のものではない。また、普遍的な視点に基づく理論的な分析はなされていない状況である。

このように、言語の通時的変化が共時的体系にどのように組み込まれるかを普遍的枠組みで捉えるには、ロシア語についてのデータ・分析共に課題が多く残されている状況で

ある。

2. 研究の目的

言語の共時的現象と通時的変化は、混同してはならないものであるが、実際の言語においては、通時的変化のすべてが完了しているというわけではなく、変化の過程が共時的現象に表れている場合がある。報告者はこのような現象に対する理論的説明の枠組みを構築することを目標としており、長期的な研究の目的は次のとおりである。

- ・諸言語のさまざまな共時的音韻現象に表れる通時的変化の方向性を指摘する。
- ・個別言語において通時的変化が文法に組み込まれていく過程で、言語知識と言語能力においてどのような変化がどのような順序で生じるかを理論的に説明する。
- ・通時的変化が体系に組み込まれる場合の言語知識と言語能力における変化について普遍性を検証する。

科学研究費の交付を受ける期間内の研究の目的は、具体的には次の点を明らかにすることであった。

- (1) 現代ロシア語の最新のデータにおけるロシア語固有の名詞パラダイムのアクセントパターン
- (2) 近現代にロシア語に取り入れられた借用語のアクセントと原語のアクセントとの関係から見た、ロシア語におけるアクセントの決定の仕組みの変遷
- (3) ソ連崩壊後の借用語の増大がロシア語固有の名詞のアクセントの仕組みに与える影響

3. 研究の方法

「1. 研究開始当初の背景」の項で述べたように、ロシア語の名詞のストレス位置には、これまでの研究から a) ~d) のような要因が

関わっていると考えられるが、そのうち、b) 借用語における原語のアクセント、c) 類似の語末要素からの類推、の2点については、借用語の増大に伴って、さらに新しいデータの収集とその分析が必要である。また、これらのほかに、ロシア語の名詞にアクセントのデフォルト性があるか否かという、より根本的な問題に取り組むために、他の言語においてアクセントに影響を及ぼしていることが指摘されている音韻論的な要因として、e) 語の音節構造、f) 語の長さ（音節数）、g) 語に含まれる母音の種類、といった要素がかかわっていないかどうかを確かめる必要がある。

これらの要素のうち、まず主として e) ~ g) がストレス位置に関わっているか否かを調べるため、国内での予備調査を経て、ロシア連邦リャザン市においてネイティブスピーカーを対象とした無意味のストレス位置についての調査を行った。その方法は、あらかじめロシア語ネイティブスピーカーの協力で既存の語や形態素を連想させないように配慮した無意味語のリストを作成し、被験者（ロシア語を母語とする大学生）にストレス位置を指定してもらうというものであった。

また、この調査のための渡航の際に、ロシアで発売中の最新の借用語辞書やアクセントに関する文献を収集した。

次に、b)および c) の要因の影響について調べるため、借用語辞書 Krysin, L. P. (2008) *Ill'ustrirovannyj tolkovyj slovar' inostrannyx slov*. Moskva: Eksmo. から英語からの借用語を抜き出し、原語のストレス位置との比較・語構成の影響・語末要素によるストレス位置の偏りを調べ、Superanskaja (ibid.)のデータと比較した。

4. 研究成果

本研究課題の前半の成果は、ロシア語の名詞のストレス位置のデフォルトを明らかにするための取り組みとして、無意味語のストレス位置の調査から、語の音節構造・語の長さ（音節数）・語に含まれる母音の種類、さらに借用語に置いてストレス位置の偏りがあるとされる語末要素の無意味語のアクセントへの影響の有無を明らかにしたことである。

この調査の結果から、次のことが明らかになった。

- (1) 語末が子音である場合は語末音節、語末が母音である場合には次末音節にストレスが置かれることが多い。
- (2) 音節の重さはストレス位置に影響を与えない。
- (3) 語幹において、広母音あるいは /o/ を持つ音節は狭母音を持つ音節に比べてストレスが置かれることが多い場合がある。
- (4) 音節頭子音の有無と数はストレス位置に影響を与えない。
- (5) 既存の語において偏ったストレス位置の分布を示す語末要素が無意味語においてもその偏りを示すとは言えない。

これらの結果のうち(1)は、無意味語あるいは被験者にとって未知の借用語のアクセントに関する先行研究の示唆するところとも矛盾せず、結局、語幹末がストレス位置のデフォルトであると考えられる。ロシア語は自由アクセント言語とされており、事実、実際に使用されている語彙のストレス位置は語構成等の形態論的条件によって様々なストレス位置を示すが、そうした語彙のアクセントをデフォルトとそれからの逸脱の要因によって分析するための立脚点が見出されたとと言える。

本研究課題の後半の成果は、前半に得られ

たデフォルトアクセントの仮説に基づき、借用語のアクセントにおけるデフォルトからの逸脱の条件を分析したことで、デフォルトアクセントと固有語のアクセントとの関係について考察したことである。

まず、デフォルトの位置と実際の借用語に見られるストレス位置との比較から、借用語のストレスがどのように決定されているかについて調査を行った。その結果、借用語でもこのデフォルトに一致するものが数多くあるが、それ以外の位置にストレスを持つ語については、原語のストレス位置およびストレスを持ちにくい派生形態素の存在、それにロシア語における複合語アクセントの傾向によって説明できることが明らかになった。

さらに、通時的研究から得られた固有語のアクセント法と上記の借用語のそれとを比較してみると、まずシステムの比較からはデフォルト位置の変化（語頭→語幹末）が挙げられる。そして、語彙項目ごとの指定に関しては、固有語の通時的分析では屈折変化において固定したストレスを示す語幹が有標、ストレスが移動する語の語幹は無標とされたのに対し、固定したストレスを示す語が増えた現代では、語幹末に固定したストレスが無標、それ以外の位置にストレスを持つものやストレスが移動する語が有標と考える方が、各形態素が担うべき特性が少なくなり、効率的な説明になることがわかった。

この結果は、自由アクセント言語であるロシア語のアクセントも、英語や日本語と同様に形態素ごとの特性のみに頼らず、ある程度ストレス位置を予測することが可能であることを示している。

今後の課題としては、主に使用頻度の高い固有語に含まれる、少数ながらパラダイム内で複雑なストレスの移動を示す語をデフォルトアクセントとの関係でどのように説明

するかを、アクセントパターンの変遷を追いながら明らかにすることが挙げられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 安藤智子「現代ロシア語名詞アクセント法にかかわる形態論的・音韻論的条件の関係について」『富山大学人文学部紀要』第53号(2010)印刷中のためページ未定、査読無し
<http://utomir.lib.u-toyama.ac.jp/dspace/handle/10110/25>（手続き未完）

② 安藤智子「ロシア語母語話者に対する無意味語アクセント調査」『富山大学人文学部紀要』第50号(2009) pp. 23-41、査読無し
<http://utomir.lib.u-toyama.ac.jp/dspace/handle/10110/25>（手続き未完）

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 智子 (ANDO TOMOKO)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：00345547

(2) 研究分担者 ()

研究者番号 :

(3) 連携研究者 ()

研究者番号 :